

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284010

研究課題名(和文) スティラマティ(安慧・堅慧)の思想の総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Sthiramati's Thought

研究代表者

佐久間 秀範 (SAKUMA, Hidenori)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90225839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000 円

研究成果の概要(和文)：従来の仏教学で常識とされてきた安慧(スティラマティ)に関する伝承には梵文原典から得られる内容と齟齬がある事に基づき、スティラマティが単一の人物でないと考えられることを出発点として本研究を行った。その結果次の三点が確認された。写本に基づく『中辺分別論』などの註釈者は同一人物でチベット語訳に残る『大乘莊嚴經論』の註釈者とは異なること。教学の描く安慧の思想内容は梵文原典に見いだせないこと。近現代仏教学の伝承がヴァラビー出土の銅板碑文に見られるスティラマティという人物と『大唐西域記』の堅慧とを同一視したために起こった誤りで、このスティラマティは上記いずれの人物とも別人であると見なされること。

研究成果の概要(英文)：This study was undertaken because discrepancies can be found between traditional accounts of Sthiramati, accepted as conventional wisdom in Buddhist studies, and the information obtained from his Sanskrit commentaries, and it started out from the premise that there may have been more than one Sthiramati. The following points were ascertained. (1) The Sanskrit commentaries on the Madhyantavibhaga, etc., attributed to Sthiramati were written by the same person, who differs, however, from the author of the commentary on the Mahayanasutralamkara surviving in Tibetan translation. (2) Sthiramati's ideas as presented in traditional doctrine cannot be found in his Sanskrit commentaries. (3) The account of Sthiramati given in modern Buddhist studies represents an erroneous view that arose because the Sthiramati mentioned in copper-plate inscriptions from Valabhi was identified with Jianhui mentioned in the Da Tang xiyuji, but this Sthiramati differs from both of the above commentators

研究分野：印度哲学仏教学

キーワード：仏教学 瑜伽行唯識思想 スティラマティ 安慧 堅慧 中国唯識教学 日本法相教学

1. 研究開始当初の背景

本研究で扱うスティラマティの漢訳名には「安慧」と「堅慧」とがある。後者は『大乘法界無差別論疏』(T.No.1838, 63c5 唐 法蔵撰)「堅慧菩薩者。梵名娑囉末底。娑囉。此云堅固。末底云慧。」とあることから Sāramati を想定する可能性もあるが、Sthira は「堅固」の意味を持ち、「堅慧」も Sthiramati を原語することが認知されている(cf. Digital Dictionary of Buddhism)。『大唐西域記』伐臘毘(以下：ヴァラビー)国の所に「堅慧」とあり、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』のヴァラビー(伐臘毘)国の所に、玄奘が師事あるいは行動を共にした勝軍が戒賢と「安慧」に師事したとある。またヴァラビーの碑文に登場する僧院建立に関わる複数の Sthiramati について、塚本啓祥の研究では碑文 7(588 A.D.)と碑文 21(662 A.D.)に記される 2 人の安慧を別人とし、Njammasch の研究は碑文 21 の安慧が碑文 7 の安慧を意味し、1 人(碑文 7: 588 A.D.)であるとしている。**玄奘はこのヴァラビーの安慧の系統とナーランダーの戒賢の系統との双方を継いでいることになる。**一方、東アジアの法相教学では、安慧が護法と最も対立する人物とする説が広く定着してしまっている。それは「安難陳護一二三四」に由るものである。しかしこの説は玄奘が『仏地経論』『成唯識論』で護法を正統説とし、その主軸として「証自証分」を提示したことに始まるのである。「証自証分」の証拠がインド文献には存在しない事実から、戒賢以前に実在した護法が唱えた可能性は低い。さらに安慧が一分説を採ったという伝承に関しても安慧の主張とする根拠はない。

研究代表者(佐久間)が『大乘莊嚴經論』安慧釈に提示される八識と四智の対応関係および五性各別の思想を検証した結果、この安慧釈の説が玄奘によって正統説とされていることが判明した。すなわち玄奘は『仏地経論』以前の漢訳(プラバーカラミトラ訳『大

乘莊嚴經論』・玄奘訳『攝大乘論』無性釈)に見られるナーランダーの系統の説を廃してヴァラビーの安慧の系統を正統説としたことになる。**これは法相教学の正統説が護法の説であるという伝承と真っ向から対立する。**上記安慧釈は蔵訳のみであり、訳文に多々問題点が見られ、梵本の忠実な翻訳と思われる点がある。はたして上記の矛盾は蔵訳の誤りに起因するのだろうか。もし正しい翻訳であるなら、この安慧は碑文 7(588 A.D.)以前の安慧と別人の可能性もある。それは上記安慧釈のみがこの説を唱えているのであり、梵本『中辺分別論』安慧釈、『唯識三十頌』安慧釈の必要な部分にこの説が登場しないからである。上記八識と四智の対応関係等の完成が『大乘莊嚴經論』安慧釈と玄奘訳『仏地経論』であるならば、他の安慧の著作との思想的な温度差はどこから来るのだろうか。

以上のような経緯から、梵本写本のある安慧の著作を写本に基づいて再度読み直し、現在の梵本校訂本の検証、蔵訳と漢訳の精査による比較検討によって、**安慧に帰せられる文献の内容に基づいて、同一人物なら註釈の性格上視点を変えて註釈したこと**に起因する**のか、あるいは複数の安慧を考えるべきか、など年代論決定の鍵となる根拠の精査も含めて、総合的に安慧の思想研究を行う必要性に思い至り、本研究を計画するに至った。**

2. 研究の目的

本研究(課題名: スティラマティ(安慧・堅慧)の思想の総合的研究)の目的は、近年の梵本写本の発見および校訂作業などを通じて、**従来の伝承に基づく安慧**(以下「安慧」に統一)**の思想を総合的に見直す環境が整いつつある中で、安慧の著作とされる諸文献を**[1]瑜伽行唯識理論の展開史の中での吟味、[2]写本に立ち返っての梵本・蔵訳・漢訳の再吟味、[3]『述記』等の諸文献の作り上げた東アジアの法相教学の伝承の吟味、[4]中観派との

論争等を伝える諸文献の比較考察に基づく安慧『大乘中観釈論』の再吟味により、**諸文献が一人の安慧の著作であるかという疑問の解明と、諸論師との思想的比較に基づく年代論の確定を目指す、安慧の思想の総合的研究である。**

3. 研究の方法

研究の目的であげた四つの方法論の意図は次の如くである。[1]重要な複数の瑜伽行唯識理論をテーマに主要文献の偈頌・諸註釈間でどのような思想史的展開があるかを吟味する。[2]梵本写本、校訂テキスト、蔵訳・漢訳の比較検討により異同を精査し、現存写本を基準に、[1]のテーマについて梵蔵漢の間でのテキストの変容および思想的展開を考察する。[3]基の『成唯識論述記』、『唯識二十論述記』、『辯中邊論述記』を中心にして、大正新脩大蔵経テキストデータベースや CBETA で網羅的に検索しながら、安慧の思想が東アジア文化圏ではどのように理解されていたかを考察する。[4]安慧造『大乘中観釈論』を護法造『大乘広百論釈論』と比較検討し、そのほかの『中論』註釈文献の内容を踏まえて、『大乘中観釈論』に見られる安慧の思想を解明する。

4. 研究成果

平川 彰 1979 『インド仏教史』下巻 pp.228-250 で述べられている安慧の情報がこれまでの仏教史の常識であった。ところが唯識理論の歴史的推移からすると『中辺分別論』『唯識三十頌』のスティラマティの註釈書に見られる内容が、チベット語訳のみに残る『大乘莊嚴經論』のスティラマティの註釈書に見られる内容と大きく異なっていることを代表者は見出した。前者が玄奘より以前であるのに対して後者は玄奘と同時代かそれ以降でなければ知り得ない理論内容をもっていることが根拠であった。そこで今回基盤研究 B「スティラマティ（安慧・堅慧）の

思想の総合的研究」（平成 25 年度～平成 28 年度）を獲得し、初年度に「註釈家スティラマティは一人か？」として学会発表と論文発表を行ったことを端緒に、当テーマに関心を寄せる研究者達と共同研究をおこなった。

その結果近年スティラマティに帰される諸文献の梵文写本の発見により『中辺分別論』『唯識三十頌』の註釈書だけでなく『五蘊論』『俱舍論』の註釈書の用語法を含め様々な観点から同一人物の著作である可能性が高いのに対し、上記『大乘莊嚴經論』の註釈書が後代であることが国内外のスティラマティ研究者の認知するところとなった。

すると従来のヴァラビーのスティラマティが法相教学の安慧と同一人物で、しかも世親（Vasubandhu）の著作に註釈を書いたという学説はどこから興り、どのように継承されたかをまずは検証する必要が出てきた。

そこで本研究では当学説の起源が、『大唐西域記』の伐臘毘国（＝ヴァラビー）に玄奘が記した「堅慧」を Sthiramati として欧州の研究者達が定着させたことにありと睨み、そこから吟味検証をする必要性があるという結論に至った。『大唐西域記』は Stanislas Julien が 1857-58 年に初めて仏訳し、次いでインド・グジャラート州ヴァラビー出土の銅板碑文に Sthiramati の名があり寺院を建立したとあったことから、これを見た Bühler は 1877 年発行の The Indian Antiquary, vol. VI, pp.9-10 で” The Sthiramati mentioned in our grants and by Hiwen Thsang is, no doubt, the famous pupil of Vasubandhu, who composed commentaries on the writings of his master”と述べた。1884 年発行の Samuel Beal『大唐西域記』英訳 vol.2, p.268 でははっきりと「堅慧」を Sthiramati と訳し、註 76 を付して Vasubandhu（世親）の著作に多くの註釈を書いた人物と書いている。その註に南條文雄の名がある。南條は当時オックスフォード大学など欧州にいたことが判っている。つまり欧州では、玄奘がわざわざ「安

慧」ではなく「堅慧」と記した人物を、法相教学で正当説を唱える論師「護法」と最も対立する「安慧」と同一人物とし、ヴァラビーには徳慧とともにいた人物に違いないと決定づけた。これによって註釈家スティラマティと法相教学の安慧とヴァラビーの堅慧が同一人物であることが揺るぎないものとなった。そこで『大唐西域記』を受け継ぐ『慈恩伝』などの玄奘の他の紀行文のヴァラビーの箇所に何故玄奘がその名すら記さなかったのか疑問である。チベットの伝承「Blo brtan」も中国の伝承「安慧」もナーランダーの学匠としては共通している。ならば玄奘がヴァラビーの箇所に「安慧」ではなく「堅慧」と記したのは理由があるはずである。これを検証する必要があることに至り、これまでの仏教史を書き換えなければならない可能性を見出すことができた。

次に 唯識中観の諸論師の相互引用、相互批判が安慧の『大乘中観釈論』、清弁の『般若灯論釈』と観誓の疏、および護法の『大乘広百論釈論』に見られることなどを根拠に安慧、清弁、護法の年代が設定された。護法の著作はすべて漢訳のみである。しかも唯識教学の現在の研究成果から、護法が早世し一歳年上の戒賢が継いだ伝承など、彼の伝記は信憑性が疑わしい。チベット語訳と対比すると漢訳『般若灯論釈』には誤訳が多い。その副註釈である観誓のチベット語訳に「Blo brtan」とあり、これが「安慧」であるとして議論が進んだ。『大乘中観釈論』は宋代の訳で、羅什訳や玄奘訳にない漢文解釈が必要な上、インド・チベットの中観派の思想との対比および唯識教学・法相教学との対比をしながら内容の解析をする必要があることが本研究の中で明らかになった。そこで本研究では中観派と両教学を専門とするチームで解説を進めた。また梵文の回収できる『中辺分別論』『唯識三十頌』『五蘊論』『俱舍論』のスティラマティ釈は内容の類似、文章の類似など

様々な観点からほぼ同一人物であると見なされることが確認された。一方、チベット語訳者が十分に原文を理解できなかったと自白する『大乘莊嚴經論』スティラマティ釈には、玄奘訳『仏地経論』以降にしか見られない両教学の「八識と四智の結合関係」「五性各別」がはっきりと見られることから、先のスティラマティとは別人とほぼ確定するに至った。その上で『大乘中観釈論』の安慧と上記両スティラマティとの思想内容の相互関係を吟味検証する必要があるという結論に至った。

唯識教学・法相教学の研究は現在かなりの進歩を遂げ、「安難陳護一二三四」「五性各別」とどまらず、以前とは比較にならない程の研究成果がもたらされている。真諦が安慧を継承するという伝承に信憑性がないことも、伝承の起源に遡ってかなりはっきりしている。こうした成果をもって、唯識教学・法相教学の伝える「安慧」像がどのようにしてできあがったかを吟味検証し、註釈家スティラマティと安慧を比較検討する必要があるという結論にも至った。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

1. 斎藤明、シャーンティデーヴァの〈廻向〉論——新旧『入菩薩行論』最終章を中心として (1)、成田山仏教研究所紀要、第40号、2017、57-69 査読無

2. YOSHIMIZU, Chizuko. How Did Tibetans Learn a New Text from the Text's Translators and Comment on It? The Case of Zhang Thang sag pa (Twelfth Century). Cross-Cultural Transmission of Buddhist Texts: Theories and Practices of Translation, ed. Dorji Wangchuk. Indian and Tibetan Studies 5. Hamburg: Department of Indian and Tibetan Studies, University of Hamburg, 2016, 353-372. 査読有

3. 吉村誠、『成唯識論』の三性説の解釈について、駒澤大学仏教学部論集、第47号、2016、193-204 査読無

4. SAKUMA, Hidenori. Buddhism and Buddhology from the Viewpoint of Yoga Practice and Practical Theory, *Taiwan Journal of East Asian Studies*, Vol.13, No.1 (Issue 25), 2016, 35-55 査読有

5. 佐久間秀範、梵天勧請と初転法輪の意味するもの - 瑜伽行派の立場から -、転法輪の歩み (智山学報第 65 輯) 2016、35-50 査読無

6. 佐久間秀範、唯識思想解析のための修行者の視点、三友健容博士古稀記念論文集 智慧のともしび アビダルマ佛教の展開 インド・東南アジア・チベット篇、2016、169-190 査読無

7. 吉村誠、玄奘の年次問題について、駒澤大学仏教学部論集、第 46 巻、2015、183-205 査読無

8. 吉村誠、中国華嚴思想における唯識思想の解釈 - 法蔵の三性説を中心に -、東アジア仏教学術論集 - 日・韓・中 国際仏教学術大会論文集 -、第 3 号、2015、73-88 査読無

9. 吉村誠、中国唯識における円測の位相 - 三性説を中心に -、駒澤大学仏教学部論集、第 45 巻、2014、207-219 査読無

10. Saito, Akira. A Shape in the Mist: On the Text of Two Undetermined Sutra Citations in the Prasannapada, *Studies in Indian Philosophy and Buddhism*, 20, 2013, 17-26 査読有

11. 吉村誠、玄奘所伝の瑜伽行派の系譜 『大唐西域記』を中心に、印度学仏教学研究、第 62 巻第 1 号、2013、20-27 査読有

12. YOSHIMURA, Makoto. The Weishi School and the Buddha-Nature Debate in the Early Tang Dynasty, *The Foundation for Yoga Practitioners; The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, Harvard University Press Cambridge, 1234-1253. 2013. 査読有

13. 佐久間秀範、註釈家スティラマティは一人か?、仏教学、第 5 5 号、2013、59-86 査読有

〔学会発表〕(計 13 件)

1. SAKUMA, Hidenori. Words Lie: With Reference to Yogācāra-Vijñānavāda Thought, October 6th, 2016, Harvard University (Cambridge・USA)

2. SAKUMA, Hidenori. Verbal

Conceptualization in Yogācāra, International Symposium “Pluralism in Mahāyāna Buddhism: Strategies of Demarcation, Inclusivism and Tolerance”, September 13th, 2016, University of Tsukuba, Tokyo Campus (Bunkyo・Tokyo・Japan)

3. 佐久間秀範、ヴァラビーのスティラマティと註釈家スティラマティ、第 61 回国際東方学会会議「スティラマティの虚像と実像」、2016 年 5 月 20 日、日本教育会館 (東京都・千代田区)

4. 伊藤康裕、安慧の唯識説における識の顕現について - nir-bhas の用例に対する一考察 -、第 68 回日蓮宗教学研究発表大会、2015 年 11 月 7 日、日蓮宗宗務院 (東京都・大田区)

5. 師茂樹、日本古写経に見える玄奘伝、玄奘フォーラム、2015 年 12 月 12 日、筑波大学東京キャンパス (東京都・文京区)

6. 佐久間秀範、旅する玄奘の思想的変遷、玄奘フォーラム、2015 年 12 月 12 日、筑波大学東京キャンパス (東京都・文京区)

7. SAKUMA, Hidenori. The Yoga Practitioner's Viewpoint as a Benchmark for Analyzing Yogācāra Thought, The Tsukuba-Hamburg Universities Symposium Series “Scholastic and/or Yogin? The works attributed to the Indian medieval scholar Sthiramati”, Sthiramati Symposium, August 2 8th 2015, Hamburg University (Hamburg・Germany)

8. SAKUMA, Hidenori. Buddhism and Buddhology from the viewpoint of Yoga Praxis and Practical Theory, International Symposium “Bridges Between Asia and Europe: Buddhism in Contemporary Societies, March 12th-14th 2015, University of Ljubljana (Ljubljana・Slovenia)

9. MORO, Shigeki. Xuanzang's Proof of Idealism (Vijnaptimatratā): The Origin and Controversies, Colloquium, University of Hamburg, 10th December 2014 (Hamburg・Germany)

10. MULLER, Albert. Wonhyo and the Samdhinirmocana-sutra, Annual Meeting of the American Academy of Religion, November 21st 2014 (San Diego・USA)

11. 佐久間秀範、註釈家スティラマティの諸著作を吟味する新たな指標、国際シンポジウム「註釈家スティラマティの実像へのアプローチ」、2014 年 9 月 27 日、筑波大学東京キャンパス (東京都・文京区)

12. 佐久間秀範、インド瑜伽行唯識思想におけるスティラマティ、日本印度学仏教学会第 65 回学術大会、2014 年 8 月 31 日、武蔵野大学

有明キャンパス（東京都・江東区）

13. 佐久間秀範、註釈家スティラマティは一人か？、仏教思想学会第29回学術大会、2013年7月6日、駒澤大学（東京都・世田谷区）

〔図書〕（計3件）

1. 橘川智昭、新編国訳成唯識論・第三版（増補版）、中山書房仏書林、199頁、2015

2. 吉村誠、加藤朝胤、大谷胤奘、玄奘三蔵と薬師寺、薬師寺、144頁、2015

3. 吉村誠、『中国唯識思想史研究 玄奘と唯識学派』大蔵出版、524頁、2013年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐久間 秀範（SAKUMA, Hidenori）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90225839

(2) 研究分担者

吉水 千鶴子（YOSHIMIZU, Chizuko）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10361297

吉村 誠（YOSHIMURA, Makoto）

駒澤大学・仏教学部・教授

研究者番号：60298106

斉藤 明（SAITO, Akira）

国際仏教大学院大学・仏教学研究科・教授

研究者番号：80170489

(3) 連携研究者

山部 能宜（YAMABE, Nobuyoshi）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40222377

デアヌ フロリン（DELEANU, Florin）

国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・教授

研究者番号：10271404

ミュラー アルバート（MULLER, Albert）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：60265527

橘川 智昭（KITSUKAWA, Tomoaki）

東洋大学・東洋学研究所・客員研究員

研究者番号：40599388

師 茂樹（MORO, Shigeki）

花園大学・文学部・教授

研究者番号：70351294

(4) 研究協力者

箕浦 暁雄（MINOURA, Akio）

大谷大学・文学部・准教授

加納 和雄（KANO, Kazuo）

高野山大学・文学部・准教授

根本 裕史（NEMOTO, Hiroshi）

広島大学・文学研究科・准教授

早島 慧（HAYASHIMA, Satoshi）

龍谷大学・非常勤講師

伊藤 康裕（ITO, Yasuhiro）

早稲田大学・非常勤講師